

心とはいかなるものか？

—古代日本人の形而上学的思想—

日時

2020年1月28日 (火曜)

17時～19時

会場

法政大学市ヶ谷キャンパス
ボアソナードタワー26階A会議室
(入場無料・事前予約不要)

司会

小口雅史

法政大学国際日本学研究所長
文学部教授

報告者

クリステワ・ツベタナ

法政大学国際日本学研究所客員所員

国際基督教大学教授

ロコ・ソフィア大学・ブリガリア科学アカデミー

(1984年)、東京大学(2000年)

著書

『涙の詩学—王朝文化の詩的言語』

名古屋大学出版会、2001年

『心づくしの日本語—和歌でよむ古代の思想』

筑摩書房、2011年

『パロディと日本文化』笠間書院、2014年

古代日本には、ソクラテスやプラトン、老子や孔子など、有名な哲学者はいない。

その代わりに日本にいたのは、貫之や定家、和泉式部や西行など、優れた歌人である。それは何を意味しているのだろう。天皇から僧侶などまで、教養ある人はみんな、和歌を作っていて、和歌を通して一般的コミュニケーションを行っている、形而上学的議論を進めていた。

「心」という古代日本文化を特徴づけている基本概念に焦点を合わせて、和歌というメディアの働きについて簡単に触れた上、「心」の概念化過程を追究してみる。

□お問い合わせ

法政大学国際日本学研究所事務室

E-mail : nihon@hosei.ac.jp

電話 : 03-3264-9682